

# 修 士 論 文 要 旨

学籍番号 21GH208第 号 氏 名 福井誠希

人文社会科学専攻（コース：現代共生）

## 論文題目

旧制弘前高等学校の教育制度・生徒管理および雑誌発行に関する基礎的研究  
——太宰治との関係を含めて——

本研究は、弘前大学附属図書館所蔵の旧制弘前高等学校関係資料を用いて、その教育制度・生徒管理ならびに雑誌発行の実態を明らかにすることを目的としている。また、そこから発展して太宰治の伝記的研究の問い直しも行った。教育制度・生徒管理と、雑誌発行を対象としたのは、太宰に関して、当時の弘高の状況を含めた記述や、その研究が多く残されており、より多角的な調査が可能であると考えたからである。

旧制弘前高等学校関係資料の活用は、太宰治の伝記的研究を中心に行われてきた。その一方で、学校史の編纂などの、歴史研究、教育研究の分野においては活用されてこなかった。そういった分野においては、卒業生の回想文や、当時の新聞雑誌を対象に研究がなされてきた。このような現状に対して、同時代の当事者による史料を補完することで、その動向を叙述する。

第1章では、旧制弘前高等学校における成績評価とその発表方法の調査を、太宰治の伝記的研究の再考とともにを行った。太宰在校当時（1927年度～1929年度）の成績評価は、試験の成績のみならず、授業態度や出欠、普段の生活態度などといったことも参考にされていた。さらに、その評点は非公開であった。そのため、成績評価は不透明な方法で行われていたといえる。そこには、生徒の自主的な生活態度の改善と、向学心の向上を促す生徒管理的な意図があったと考えられる。そのような生徒管理が行われた当時、太宰は成績を下降させていったとされる伝記的研究があるが、その論拠となるものは見いだせなかった。

第2章では、『校友会雑誌』の編集方針の変遷について、旧制弘前高等学校を取り巻く状況の変化から調査した。『校友会雑誌』は、開校と同年の1921年に、生徒と教員の評論や創作および、校友会各部の状況や、学校行事を載せる学校当局の機関誌として出発した。1923年の第2号からは、校内情勢を載せなくなり、校友会の機関誌となった。1928年の『弘高新聞』の創刊によって、校友会各部の報道が『弘高新聞』の役割となると、『校友会雑誌』は創作と評論を載せる総合雑誌となった。『校友会雑誌』と『弘高新聞』の発行を担った新聞雑誌部に、1928年から1930年にマルクス主義的団体と関係を持つ生徒が参加したことで、学校当局の積極的関与が始まると、体裁の整備と文芸雑誌化が進められた。『弘高新聞』が廃刊した1932年以降の『校友会雑誌』は、再び校友会の機関誌的性格を持つようになった。その後、1940年の報国団の結成によって、校内情勢を伝える学校当局の機関誌的性格を持つようになった。